



朝一小だより

活気があふれ、心が潤い、一人一人がより良く生きる学校

Tel048-461-0052 <http://www.asakadailshou.city-asaka.ed.jp/>

学校教育目標

・考える子
・やさしい子
・たくましい子



朝霞市立朝霞第一小学校

令和7年10月1日

児童数 613名



伝わるように伝えてください

校長 金子 二郎

暑さ寒さも彼岸までと言われても訝るくらい、最近まで酷暑の余波が続き、熱中症計を片手に運動会の練習に取り組む日もあります。かと思えば、風向きが変わりにわかには空模様が怪しくなると瞬く間に土砂降りの雨に見舞われ、黒目川も児童が安心して登下校ができるのかと怖くなるくらいの流れとなる時もあります。それでも朝晩に涼しげな風が吹くと、待ちかねたように虫の声が聞こえるようになりました。感染症も心配です。保護者や地域の皆様におかれましてもお体に気を付け健やかに過ごしてください。



さて今年度も折り返しを迎えますが、学校でもあらゆる機会を通して子供たちの様々な力を伸ばすことに努めております。中でも子供たちのコミュニケーション能力を高めることは大変重要です。これに関連して戯曲家の平田オリザさんが著書「わかり合えないことから—コミュニケーション能力とは何か」の中で興味深いことを述べています。平田さんは、日本では子供たちのコミュニケーション能力が低下しているのではなく、コミュニケーションに対する意欲が低下しているのではと懸念しています。小学校高学年や中学生になっても「単語」でしか喋らない子供が増えているとのこと。たしかに幼児期には誰もが単語でしか喋りませんが、成長するにつれて他者と出会い、単語だけでは通じないという経験を繰り返す中で「文」を手に入れていきます。この言語を習得する過程が崩れているのではと平田さんは危惧しています。大人が子供の気持ちを察し、子供が気持ちを表現する前に求めているものを与えてしまうと、コミュニケーションは必要なくなります。つまり、喋る必要がなくなることで、能力を身に付ける必要もなくなり、コミュニケーションの意欲すら低下してしまうおそれを指摘しています。相手を思いやる気持ちが昂じて、大人が先に立ち回することで子供が自分の意思を伝える機会を奪ってしまう場合があるのかもしれませんが。子供は表現することが不得手なのはむしろ当たり前で、その内面を察した時に短絡的に答えを示すのではなく、大人もあえて我慢して「じゃあこうしてみては」と考えさせたり、時には苦勞をさせたりすることの方が、結果的には子供の能力を高めることにも繋がります。自分とは異なる他者は、たとえ家族であってもすべてを理解するのは極めて困難です。お互い「わかるのが当然」なのではなく、相手をわかろうと努力すると同時に、相手に伝える技術と努力のいずれもが、双方に必要です。そう考えると「相手にわかってもらえない」という苦勞も、子供たちにとって大切な経験なのかもしれません。シャットダウンせずに関わり続けようとする力こそがコミュニケーション能力の礎なのかもしれません。



人生、苦勞するとたいしたことでもないのが すごーくありがたく思えるものかもよ (さくらもこ)